

ペルツェク・チベット文古籍研究室編纂

『デブン寺所蔵古籍目録』

井 内 真 帆

1. はじめに

「セ・デ・ガ・スム se 'bras dga' gsum (セラ Se ra 寺, デブン 'Bras spungs 寺, ガンデン dGa' ldan 寺の三寺)」といわれるラサ三大寺の一つであるデブン寺(正式名称 bKra shis dpal ldan 'bras spungs dgon)は、1416年にジェ・ツォンカパ rJe Tsong kha pa Blo bzang grags pa (1357-1419)の弟子、ジャムヤン・チュージェ 'Jam dbyangs chos rje bKra shis dpal ldan (1379-1449)により建立された。チベット自治区ラサ市の北西に位置し、現在も約六百人の僧を有するチベット最大規模の寺院である。

この度、このデブン寺が所蔵する22320部にも及ぶ古籍の目録、『デブン寺所蔵古籍目録 'Bras spungs dgon du bzhugs su gsol ba'i dpe rnying dkar chag』が、ペルツェク・チベット文古籍研究室 dPal rtsegs bod yig dpe rnying zhib 'jug khang の編纂で民族出版社(北京 2004年12月)より出版された。目録中大部分を占めるネチュ・ラカン gNas bcu lha khang に納められた古籍は、ダライ・ラマ五世 rGyal dbang sku phreng lnga pa Ngag dbang blo bsang rgya mtsho (1617-1682)の秘蔵書であり、これまでその存在を知る者はごく限られていた。したがって、この目録出版を以って初めて、ネチュ・ラカンをはじめとするデブン寺所蔵古籍のはほぼ全容が紹介されることとなった。目録冒頭部分の序文(pp.1-12)には、各蔵書の解説及び編纂の経緯などが書かれており、簡単ではあるが興味深い記述ばかりである。ここでは、この序文に基づき、筆者がラサ滞在中に編纂者から直接見聞した編纂の経緯や作業の様子を加え、膨大な数の

古籍を収録するこの目録を紹介したい*。

2. 目録の構成と内容

まず、目録に記載されている各古籍の情報は、(a)典籍の表紙に書かれている番号、(b)目録編纂の際に付加した番号、(c)タイトル、(d)著者、(e)書体、(f)葉数、(g)サイズの七項目である^①。目録の構成は以下の通り。

- (1) デブン・ネチュ・ラカン所蔵目録 'bras spungs gnas bcu lha khang dpe mdzod dkar chag// pp.1-1958
- (2) デブン・ポタン・シムチュンのジェ・ラムリムパ所蔵目録 'bras spungs pho brang gzim chung gi rje lam rim pa'i dpe mdzod dkar chag// pp.1959-2197
- (3) デブン・ゴマン学堂所蔵目録 'bras spungs sgo mang grwa tshang gi dpe mdzod dkar chag// pp.2198-2327
- (4) デブン・クンガー・ラワ所蔵目録 'bras spungs kun dga' rwa ba'i dpe mdzod dkar chag// pp.2328-2475
- (5) デブン・ゴマン所蔵のスンプムについて 'bras spungs sgo mang dpe mdzod kyi gsung 'bum skor// pp.2476-2480
- (6) デブン・ポタン・シムチュン所蔵のスンプムについて 'bras spungs pho brang gzim chung gi gsung 'bum skor// pp.2481-2483

次に、各蔵書の特徴について紹介したい。

(1) ネチュ・ラカン

目録の大部分を占めるのがネチュ・ラカンの蔵書である。ネチュ・ラカンとは、「十六羅漢 gnas brtan bcu drug を祀る堂 lha khang」という意味で、菩提樹で造られた釈迦牟尼仏と白檀で造られた十六羅漢が祀られており、ちょうどツォクチェン tshogs chen (大集会堂) の二階にあたる。蔵書庫は一つの部屋になっており、目録編纂以前は典籍がただ山のように積み上げられていたが、現

在は目録編纂者による寄贈の書架に典籍が整然と並べられている。

ネチュ・ラカンの蔵書は、典籍の表紙に、「外 phyi」、または「内 nang」と書かれているのが特徴的で、「外」と書かれているものは、ダライ・ラマ五世の時代に蔵書を収集するにあたって外部から持ってきたもの、「内」とあるものは、デプン寺内部にもともとあったものを指すという。九世紀から十七世紀の文献が含まれ、九十五パーセントが写本である。相承が途絶えたとされている典籍も多くあり、カダム派 bKa' gdams pa, シャンパ・カギユ派 Shangs pa bka' rgyud pa, シチエ派 Zhi byed pa 関係の典籍があり、特に、チャバ・チューキセンゲ Phywa pa Chos kyi seng ge (1109-1169), ターラナータ Ta' ra na tha (1575-1634), ポトン・チョクレー・ナムギエル Bo dong Phyogs las rnam rgyal (1375-1451) の時輪の著作など、どれも貴重なものばかりである。ちなみに、筆者の関心はカダム派の歴史にあり、その点から貴重な文献を挙げると、リンチェン・サンポ Lo chen Rin chen bzang po (958-1055) 著のアティシャ Atiśa (982-1054) 伝 *Jo bo'i rnam thar kha skong zur du gleng pa zur tsam thor bu/* (no. 017086), ラ・ラマ・イエシェー・ウー lHa bla ma Ye shes 'od (b.10c) 伝 *lHa bla ma ye shes 'od kyi rnam thar rgyas pa/* (no. 017258), ラディン Rwa sgreng 寺史 *Rwa sgreng bzhengs pa'i lo rgyus/* (no. 017285), ポトバ Rin chen gsal (1031-1105) 伝 *dGe ba'i bshes gnyen pu to ba rin chen gsal gyi rnam thar sems pa chen po'i sprod pa ngos bstan/* (no. 017302), ランリタンパ Glan ri thang pa rDo rje seng ge (1054-1123) 伝 *Sangs rgyas glang ri thang pa'i rnam thar/* (no. 017604), サンゲーゴンパ sNar thang ba Sangs rgyas bgom pa rdo rje gzhon nu (1179-1250) 伝 *Bla ma sangs rgyas sgom pa'i rnam thar/* (no. 017636), チョムデン・リクレル bCom ldan rig ral (1228-1305) 著の仏教史 *bsTan pa rgyas pa rgan gyi nyi 'od/* (no. 017182) などがある (番号は目録の番号, いずれも写本)②。

(2) デプン・ポタン・シムチュン

これは、デプン寺の通称ラムリム・リンポチエ Lam rim pa Ngag dbang phung tshogs (1922-1997) の蔵書であり、場所はちょうどガンデン・ポタン

dGa' ldan pho brang の二階にあたる。これらは生前、ラムリム・リンポチエが実際に使っていた典籍で、ツォンカパ父子 rje yab sras gsum のスンプム gsung 'bum (著作集) などがあり、版本と写本が混在している。

(3) ゴマン学堂

ゴマン学堂とは、現在デプン寺にある四つの学堂^③のうちの一つである（七学堂あったものが後に四つにまとめられた）。この蔵書は二十世紀につくられたもので、1959年までにチベットに存在した版本、特に、ゲルク派 dGe lugs pa のラマの著作が多く含まれる。ネチュ・ラカン等他の蔵書に比べれば最近のものであるが、文化大革命時（1966～1976）に多くの版本が失われていることもあり、大変貴重なものである。

(4) クンガー・ラワ

これもダライ・ラマ五世の蔵書で、ガンデン・ポタンのちょうど後ろに位置する。目録記載のチベット語文献以外にも、チベットの翻訳師やインドのバンディタが翻訳した一二七点のサンスクリット原本があったといわれている。この蔵書もネチュ・ラカンと同じように、五百年もの間、厳重に管理され秘蔵書とされてきたもので、二十世紀、チベットでサンスクリット写本収集をおこなったラーフル・サーンクリッティヤーナ Rahul Sankrityayan (1893-1963) とゲンドウン・チューペル dGe 'dun chos 'phel (1903-1951) の二人もこのクンガー・ラワの写本については知らなかったという。ちなみに、他の蔵書と同様、文化大革命時に散逸したため、現存するサンスクリット写本は十六点程度である。金網に囲まれた書架の中に積み上げて保管されており、貴重な文献群であるにも関わらず、保存状態は十分ではない。

(5)・(6) ゴマン学堂、ポタン・シムチュン所蔵のスンプム

この項目は、(2)ポタン・シムチュンのジェ・ラムリムパ所蔵目録、(3)ゴマン学堂所蔵目録に含まれないスンプムをまとめて表にしたものである。

*その他

目録中には記載されておらず、目録序文に解説があるのみであるが、デプン寺の重要な蔵書として、ミワン・ラカン Mi dbang lha khang の蔵書がある。ミワン・ラカンには、十七世紀以前のチベットにおける18種類のカンギュル bKa' 'gyur・テンギュル bsTan 'gyur の写本が保存されている。また、この蔵書には吐蕃時代の文献も多く含まれるという。

3. ダライ・ラマ五世と秘蔵書

では、これらのダライ・ラマ五世の蔵書がどのような経緯で収集され、またなぜ五百年もの間秘蔵書とされてきたのだろうか。そしてネチュ・ラカン所蔵の典籍の表紙に「外 phyi」と書かれているものはどこから持ち込まれたものなのだろうか。

まず、蔵書が収集された経緯について、一般的に広く信じられている言い伝えがある。それは、「ダライ・ラマ五世がゲルク派以外の他の宗義をなくすために、カギユ派 bKa' rgyud pa やチョナン派 Jo nang pa などの典籍をヤクの皮で包んで封印した」というものである。故に、目録編纂のために蔵書庫を開け、ヤクの皮で包まれている典籍を解く際、ゲルク派の僧侶などから少なからぬ批判の声があったという。しかし実際にヤクの皮で包まれ封印されていたものは、カギユ派でもチョナン派のものでもなく、203点のいわゆるツェルパ Tshal pa 本のテンギュル^④であったという。これについて、序文には以下のようにあり、蔵書が秘密にされ一般の目に触れなかっただけに、この言い伝えが後代に付け加えられたものであることが分かる（序文 p.9）。

ダライ・ラマ五世がカギユ派など他の宗義をなくすためにデプン寺に封印したなど様々な動機についての謂れがあるが、文献をなくすために封印するということは意味がなく、ダライ・ラマ五世はサキヤ派 Sa skya pa, ゲルク派、カギユ派、ニンマ派 rNying ma pa, シチエ派、チュー gCod^⑤など、宗義に区別はないとお考えになって、広大で偏りなく、典籍を保管・保存なさったことが窺える。例えば、時輪の著作を挙げると、ツォンカバ

父子の著作と歴代カルマパ Karma pa やチヨナン派のラマの著作などを一緒に置いていることから分かる

では、次にこれらの典籍がどこから持ち込まれたか、ということであるが、目録序文には以下のようにある（序文 p.7）。

ダライ・ラマ五世がガンデン・ポタンを始めて、チベットの寺院の蔵書にある典籍を集めた。その中には、チベットの蔵書で最大規模に数えられるバクモドゥパ 'Gro mgon Phag mo grub pa rdo rje rgyal po (1110-1170) の「バクドゥ・ペンズーカン Pag gru'i dpe mdzod khang」, デワ・ツァンパ sDe pa gtsang pa 時代 (16世紀) の「サムドゥブ・ツェ・ペンズー bSam grub rtse'i dpe mdzod」, 十七世紀初頭歴代カルマパが所蔵してきた「ツェラガン・ペンズー rTse la sgang dpe mdzod」などが入っていると言われており、これらの典籍は現在クンガー・ラワ、ネチュ・ラカン、ミワン・ラカンにある

上記の蔵書がいずれもカギユ派のものであることは非常に興味深い。ちなみに、バクドゥ・ペンズーは現在のロカ lHo kha 地区ネドン sNe gdong 県にあるネドン・ポタン sNe gdong pho brang, サムドゥブ・ペンズーはシガツェ gZhis ka rtse にあるサムドゥブ・ポタン bSam grub pho brang, ツェラガン・ペンズーはカルマ・カギユ派 Karma bka' brgyud pa で現在のコンポ Kong po 地区メンリン sMan gling 県にあるツェラガン rTse la sgang 寺のことであるが、いずれも蔵書は現存しない。しかし、ダライ・ラマ五世以前に以上のような蔵書が各地に存在していたことは確かである。例えば、トゥンカル・リンポチェ Dung dkar Blo bzang 'phrin las (1931-1997) は『テプテルゴンポ Deb ther sngon po』の解説文中、ネドン・ポタンの蔵書について言及している。『テプテルゴンポ』は、当時存在した様々な文献を元に書かれた歴史書である。氏は、著者であるゴ翻訳師 ションヌベル 'Gos lo tsa ba gZhon nu dpal (1392-1481) が『テプテルゴンポ』執筆の際、ネドン・ポタンの主人たるネドン・デシー sNe sdong sde srid と折り合いの悪さから、そこに所蔵されている膨大な数の文献を見ることができなかったこと、またネドン・ポタンやデンサティル gDan sa

mthil (ロカ lHo kha 地区サンリ Zangs ri 県), ツェタン rTse thang 寺 (ロカ地区ネドン県) などにある文献を見ていたら、今よりも著書の内容が広がっていたであろうと指摘している^⑥。

いずれにせよ、言い伝えのように、ダライ・ラマ五世がこれらの蔵書を収集したのはゲルク派以外の宗義をなくすためだったのか、それとも文献を広く保存・保管するためだったのか、今となっては明らかではない。しかしながら、ダライ・ラマ五世以前の各蔵書が現存していないことを考えると、その後多少の散逸はあるものの、彼がデブン寺に収集したことで、現在目録がつくられ、我々の目に触れることになったことは紛れもない事実である。

4. 目録の問題点とラサにおける古籍事情

次に、この目録の問題点とラサにおける古籍の保存状況について触れておきたい。目録序文にもあるように、この目録は「厳密な意味で」ダライ・ラマ五世収集当時の蔵書の全容を示すものではない。というのも、ダライ・ラマ十三世 rGyal ba sku phreng bcu gsum pa Thub bstan rgya mtsho (1876-1933) の時代に、いくつかの文献がデブン寺からポタラ宮殿に移管されたからであり、また、1962年には北京の民族文化宮に移され、後にパンチェン・ラマ十世 PaN chen sku phreng bcu pa Chos kyi rgyal mtshan (1938-1989) が1989年に北京からチベット自治区に帰還するまでの間、これらの文献は北京にあった。パンチェン・ラマ十世のチベット帰還後、民族文化宮から約五百点の写本が西藏博物館に、約百点の版本が西藏図書館に、他にもセラ、デブン、ガンデン、西藏政協、拉薩政協 (いずれもチベット自治区・ラサ)、サキヤ Sa skya 寺、シャル Zha lu 寺などに、合計千点余りの文献が分散して返還された。そして約百点は今も民族文化宮にある (民族文化宮所蔵はほとんどが版本)。またいくつかは、個人の手もとに渡り、西藏蔵文古籍出版社 (チベット自治区社会科学院) などから出版されたものもある。このように、元を辿ればデブン寺に所蔵されていた文献なのであるが、文献が振り分けられた各寺院、各研究機関同士の情報交換はほとんどされておらず、それぞれ目録が作成されているものの、ほとんどが目録の出版

及び公開もされていないというのが現状である。2005年、チベット自治区社会科学院の図書館が所蔵するデプン寺の文献も含めた目録が出版されたが^⑦、これも原本が社会科学院にあるわけではなく、民族文化宮にある文献を複写したものがチベット自治区社会科学院にあるということであり（当該目録序文参照）、目録中のどの古籍が民族文化宮にあるかという記載はなく、いずれも詳細は不明である。

5. 編纂者について

次に、この目録の編纂者について簡単に紹介をしたい。ペルツェク・チベット古籍研究室は、ラサ市内にいくつかの施設を持ち、チベット自治区では大変珍しい私設の研究機関である。同研究所は1992年に発足され、現在の形になったのは2002年である。古籍の目録編纂、入力作業などの活動を中心に行っており、資金援助のほとんどが中国国内からであるという。今後の活動としては、同じくチベット各地の寺院が所蔵する古籍の目録編纂、出版を予定している。またこれ以外の活動として、同敷地内に就学が困難な児童を集めて、授業、住居、食事を提供する施設を設けており、生徒たちに古籍の入力作業を通して、高いレベルのチベット語教育、コンピューターの訓練などを行っている。これまで、学生を蔵医学大学 gSo rig blob grwa chen mo（チベット自治区・ラサ）などいくつかの大学に輩出している。チベット自治区では以前から NGO など外国人による支援活動は盛んであったが、チベット人自身が児童の就学問題やチベット文化の保護に関心を持ち、実際に活動に携わることはまだまだ少ない。さらに、チベット自治区は厳しい統制下にあり、様々な制約があるという現実を考えると、同研究所の活動は非常に画期的である。

最後に、これは目録であり、今現在、文献を実際に手に取って見ることは非常に困難である。貴重な文献ばかりであるので、これ以上の散逸を避け、しっかりと管理・保存されるとともに、今後利用され易い形で公開されることを期待したい。

dPal rtsegs bod yig dpe rnying zhib 'jug khang, *'Bras spungs dgon du bzhugs su gsol ba'i dpe rnying dkar chag*, 民族出版社 北京, 2004年, 12月, A4判, ハードカバー, 上・下 2冊, xvi+2483+vi ページ, 価格265元 ISBN 7-105-06690-3

* 本稿執筆の際、カルマ・デレー Karma bde legs 氏（ベルツェク・チベット文古籍研究室）、カムトゥル・ソナム・トンドゥップ Khams sprul bSod nams don grub 氏（前西藏図書館）には特にご協力頂いた。記して感謝したい。

註

- ① 他に目録編纂過程で34の項目に分けたものがある（目録序文 p.16）。
- ② ネチュ・ラカンをはじめ、ギャンツェ rGyal rtse のベンコルチューデ dPal 'khor chos sde, シャル寺, セラ寺, ツルプ mTshur phu 寺, 西藏図書館などが所蔵する三十帙のカダム派の写本及び版本が同研究所の編纂で四川民族出版社（中国・成都）より出版予定である（2006年4月現在）。
- ③ 四つの学堂とは、ロセーリン学堂 Blo gsal gling grwa tshang, ゴマン学堂, ガクパ学堂 sNgags pa grwa tshang, デヤン学堂 bDe yangs grwa tshang のこと。
- ④ 『テプテル・マルポ *Deb ther dmar po*』の著者であるツェルパ・クンガ・ドルジェ Tshal pa Kun dga' rdo rje (1309-1364) の父, ツェルパ・モンラム・ドルジェ Tshal pa sMon lam rdo rje のテンギェルのこと。
- ⑤ マチク・ラプドゥン Ma cig lab sgron (1031-1129) が始めた修行法。
- ⑥ 'Gos lo gZhon nu dpal, *Deb ther sngon po*, 四川民族出版社, 成都, 1984, pp.6-7 参照。氏は典拠を示していないが、これは最近出版されたゴ翻訳師の伝記に、亥の年（1467年）12月10日の晩, 当時の地方官僚 dpon sa クンガー・レクバ Kun dga' legs pa から理由もなく所有地を立ち退くように言われたことが書かれており、氏の典拠はこのゴ翻訳師の伝記にあると思われる（Zhwa dmar Chos grags ye shes, *dPal ldan bla ma dam pa mkhan chen thams cad mkhyen pa don gyi slad du mtshan nas smos te gzhon nu dpal gyi rnam par thar pa yon tan rin po che mchog tu rgyas pa'i ljon pa*, 民族出版社, 北京, 2004, p.103）。
- ⑦ ケルサン・プンツォー sKal bzang phun tshogs 編, *Bod ljong spyi tshogs tshan rig khang gi dpe mdzod khang du bzhugs pa'i gsung 'bum dkar chag* (『西藏社会科学院图书馆藏 藏文 文集目録』), 西藏藏文古籍出版社, ラサ, 2005。